

この橋は？

東 貴 之

長崎県西彼杵半島に“西彼広域農道”という農業用道路があり、この路線沿いに“石鍋橋”という橋が存在します。西彼杵半島にこのような名前の橋があると、どうしても石鍋製作所跡（以下、製作所跡とします）との関わりを想像するのが性分です。とにかく調べてみました。結果、この地点は1996（平成8）年調査の“下茅場遺跡”であることがわかりました。遺跡はA～Gの7地点で調査が行なわれました。

広域農道西彼杵地区と呼ばれる道路は、県道12号の西海市西彼町から国道202号の西海市西海町横瀬付近に繋がる縦貫道です。この道路建設の際、下茅場遺跡が路線にかかるため、緊急調査が長崎県教育委員会と西彼町教育委員会によって実施されました。調査担当者は7箇所の地点で調査を実施していきました。現在、下茅場遺跡のD・G地点の製作所跡は西彼町の総合体育館に展示されています。また、当遺跡の時期は縦耳型石鍋→鍔付型石鍋に並行しており、それに該当する石鍋未成品が調査によって確認されています。

西彼広域農道の建設の際には下茅場遺跡のみが調査対象になりましたが、この辺りには多くの製作所跡が確認されています。近年、石橋忠治氏によって紹介された八人ヶ岳の製作所跡は、想像を超える規模で未成品が剥ぎ取られたことがわかりました。その状況は見る人を圧倒させます。このほか、ツル掛第2石鍋製作所跡は幅5～10m・高さ20～30m・奥行き100m以上の規模をもつクレバス状の遺跡です。やはり、見学するものを圧倒させる迫力がそこにはあり、カメラの広角レンズに収まることはありません。記録写真としてどう表現しようか迷うのが正直なところです。これらの遺跡群の特徴として、遺跡の存在する標高値が近いことがあげられます。どのような根拠・理由があるのかわかりませんが、長崎石鍋記録会（以下、記録会とします）で踏査した結果では①0～50m・②50～100m・③100～150mの範囲で製作所跡が分類できます。今回報告した遺跡群は②に該当します。ちなみに①は記録会で報告した「消えゆく遺跡」の製作所跡、③は白岳・小松岳にかけて存在する製作所跡群です。製作所跡群の点在をもとにこの分類を行いました。検証作業は必要です。特に地質学的な視点で滑石鉱床を観察することが研究の進展を左右するのではないかと思います。

現在、石鍋橋の南側橋脚一帯に製作所跡が保存されています。橋の上からゴミが捨てられて、環境は決して良いとはいえません。製作所跡を察していくと、滑石の採掘業者によって岩壁面が一部破壊されていることがわかりました。コンクリートカッターによる傷痕が生々しく残っていました。上記の製作所跡群のほとんどが採掘業者によって破壊されていました。広域農道の建設で遺跡の一部は消滅しましたが、まだ、見学可能な場所が残っていたことに関しては、文化財行政の大きな成果ではないかと思われます。ほかの製作所跡の記録・保存・活用に関しても期待したいです。

【引用・参考文献】

石橋忠治 2007「八人ヶ岳における石鍋製作所跡」『西海考古』第7号 西海考古同人会
東貴之・松尾秀昭 2007「消えゆく遺跡」『西海考古』第7号 西海考古同人会



写真1 石鍋橋看板（南から撮影）

南側橋脚から撮影。ほぼ直下に製作所跡が存在します。



下茅場遺跡



写真2 八人ヶ岳遠景（石鍋橋から撮影）

ここにも石鍋製作所跡が点在します。標高は下茅場とはほぼ同じです。



写真1 下茅場遺跡A地点（北から撮影）

南側橋脚下の製作所跡。ブルーシートを覆うことによって保存していたと思われます。しかし、風雨の影響で剥がれたのか、今では製作所跡が露出した状態となっています。

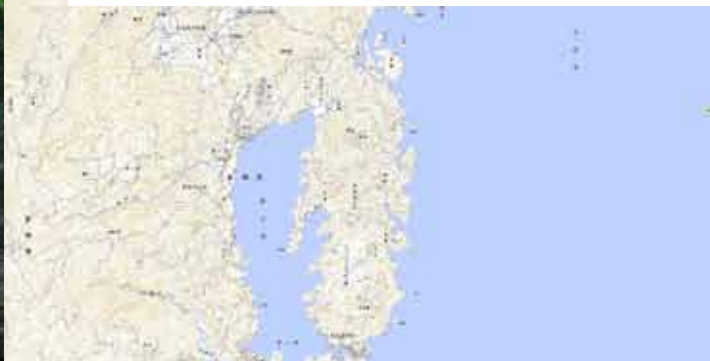


写真4 下茅場遺跡A地点拡大（北から撮影）

凹みは1人が一度に算出できる範囲を示していると考えます。この見解は下川達彌氏が指摘されている説です。